

リチャード・スチュパンスキーさん、ハロルド・エイモスさん 大牟田三池炭鉱跡地（福岡第 17 分所）訪問

今回来日された Richard（以下愛称リック）さんや Amos（愛称ミック）さんとは ADBC-MS の大会で度々お会いし、特にリックとは十年來の交流があり、ミックと行動を共にしている様子も目にしていました。

それで、大牟田の福岡 17 分所跡地の訪問に外務省の配慮で同行させてもらうことができました。



写真中央 坂井館長とリチャードさん。フェンス奥が収容所跡

た。福岡の宿には古牧さんからの資料ファイルが届いており、リックは喜んでいました。宿でリックが部屋に引き上げた後、いつもは寡黙なミックがずっと父の思い出を語っていました。彼の父が寝ぼけて母の首にヘッドロックをかけてしまうので寝室を別にしていたこと、（筆者注：捕虜の妻が夫から夢うつつの中で首をしめられそうになる例は英国でもしばしば耳にしました。）記念日トラウマ（筆者注：ある事件のあった日が近づくと体調を崩しトラウマがよみがえる PTSD）や、父を死ぬ間際に見舞うと、『ミックのこ

は他の兄弟同様、愛してるよ』と言ったことなど。日頃は本当に無口

で、父にないがしろにされて来たという思いを持つミックにしては珍しいほど、父のことを語り、父の良い面を思い出している様子でした。前日の東京での交流会でみんなが父親のことを語る様子に刺激を受けたのかもれません。彼の父親はフィリピンで衛生兵だったのでバタンの資料などもっとあればと言っていました。

翌日 5 日、私は JR で大牟田に向かい、10 時過ぎにエスコートさんらに連れられた彼らと大牟田石炭産業科学館で合流しました。すぐにリックの父が収容されていた福岡 17 分所の跡地を訪ね、坂井義哉館長が現地の石炭産業の現状と大牟田の空襲などについても、いろいろ解説されました。かつての収容所の跡地は今や豪から輸入した石炭の貯炭場になっていました。

それから三池炭鉱の三川坑跡地について、残されている炭鉱の用具などを見ました。

午後から、石炭産業科学館で、炭鉱のジオラマをみたり、実際の採掘場の復元図をみたりしました。海側にあった 17 分所と作業した三川坑の通う距離を測っていたようです。リックは父母の祖父達が炭鉱夫だったこともあり、炭鉱の多いペンシルベニア出身ですから、興味とともに理解も早かったです。

ここで捕虜だったレスター・テニー氏の証言フィルム（筆者注：熊谷博子監督作品－「終わらない炭鉱の物語」より取りだし）を 25 分ほど見ました。このように口述証言が備えられている博物館は珍しく、父親とテニー氏が同じ分所だったリックには、その証言が新たに胸に迫るようでした。

その後、会議室で「大牟田空襲を記録する会」の中嶋光秋さんから当時の土地のコピーを使い、地形から見た大牟田収容所や空襲の話などを伺いました。用意されていた捕虜の写真をいれたファイルもリックに渡されました。

自分の弟に冷たく接し、その命を縮めさせた父、酔うと幻覚の日本人監視兵と日本語らしき言葉で大声で話していた父の PTSD の思い出を持つリックはこの訪問体験に本当に感動している

ました。「父を身近に感じる経験」「父がなぜあんな風になったのか、理解できる経験」「なんともいえないヒーリングプロセス」であると話し、「表現できないほどだ」とも仰っていました。持参したお父様の日記と、捕虜郵便の綴をみせてくれました。訪れた土地の感覚や従事した仕事があったからには、この日記も郵便も新たな意味を持ち、より父親への理解が深まることでしょう。

リックも時にはテンションが高まるのですが、それが徐々にほぐれていくような経験のようでした。奥様のグローリアにつらくあたることもあると聞きますし、グローリアには元捕虜関係者の



の奥様の持つ独特な心配の表情が刻まれているのですが、きっとこの体験が彼を変えるだろうと思われました。最後にリックは、日本の空襲が軍関係の施設だけでなく、一般人の住居地に落とされたことが気になったらしく、それに関するアメリカ側の説明の WEBSITE を送ってきました。見ると被害が大きかったのは、日本の家が燃えやすいからだとか、日本が絶対降伏しないから空襲をかけ、それでも本土戦になるより死者がましだったというよくある意見でした。

最後に立命館平和ミュージアムのスタッフの皆様、大牟田の石炭産業科学館の坂井館長、大牟田空襲の会の中島様の多大なご協力に感謝申し上げます。

三池炭鉱 三川抗で、リックとミック

(報告：中尾知代さん 岡山大学教員)